

環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	15
瑪瑙集	27
紅玉集	30
8月号月評	32
惠贈句集拝見 (77)	34
惠贈俳誌拝見 (43)	36
特別作品「アメリカ鉄道の旅」I	38
琥珀集作品鑑賞	40
瑠璃集作品鑑賞 I	41
瑠璃集作品鑑賞 II	42
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	43
俳誌交歓	45
他誌転載	46
「福袋」反響と共鳴句	48
イザナミの言語学 (8)	50
三井寺吟行記	52
琵琶湖俳句サロン	54
エッセイ「浜田耕作日誌から」	55

今月の一句

鴟の下なげき乙女の伏身像 桂 樟蹊子

(昭和六十二年作)

造形芸術にも詳しい師であり、ことに碌山美術館は度々訪れられた。碌山は二十五歳でパリへゆき、ロダンの指導を受けるが、三十二歳で胸を患い亡くなったため作品は少ない。なかでも伏身の乙女像「デスペア」(絶望)がお好きでよく話題にされた。

美しいなげきの乙女の姿態は胸を打つものがある。久方ぶりにこの句に接すると、いま一度この像にまみえたいと願う気持ちが湧くと湧く。

隆子

芦屋散策

(虚子館潤一郎館)

塩路隆子

松籟に聞く鶴ばなし木下闇

子規囲む句座の絵軸やみどりさし

漱石の草稿滲む梅雨催

ふるさとの訛涼しや泊雲句

緑蔭に逢ふまぼろしの虚子の影

文豪の文机の朱や風薫り

志功画のをんなの姿態油照

八月号光耀抄

塩路 隆子選

特攻隊の三角兵舎青葉闇
灼くる地や祈りの膝を深く折り
研ぎ澄ます関の逸品牡丹鱧
国分寺跡の尺蠖木を登る
狩衣の童女上目に鍋祭
薫風や肚に当地の五平餅
首夏の海眩し空海修業窟
湖岸いま白砂波音松の芯
友引の死出の山越えほととぎす
縁紐にみ手の温もり青あらし
荒彫の秘仏微笑む麦の秋
竹琴の音色涼しや四葩膳
百片の更紗を繋ぎ夏衣
インパルスの機雲を確と夏の空
鮮魚店の並ぶ魚棚蛸が這ふ
夏霞大海原となる琵琶湖
しまなみのどの山肌も花みかん
若葉風山容とみにととのへる
稻荷社の千本鳥居木下闇

坂上 香菜
伊藤 純子
北尾 章郎
宮 田香
中村ふく子
松田 和子
鈴木 照子
山口キミコ
宮崎左智子
山本 孝夫
石川かおり
井口 淳子
木戸 宏子
森下 康子
橋本 靖子
竹内 悦子
小西 和子
片岡久美子
山崎 里美

鯖寿司の海の青さや夏まつり
 母の日の時を刻める古時計
 昆虫の葬送担ふ蟻の列
 梅雨籠眼鏡の曇り拭みている
 早苗田の広がる近江萱の家
 ミシガン船湖上に映ゆる夏の色
 奇祭とて白塗り稚児に茶わん山車
 街灯の色の重たし夏至の夜
 朝の雉子鳴くや湖東の明け初むる
 街頭にジャズのライブや梅雨の古都
 洞窟に雫の流れ九輪草
 豆の飯いまを是とせるふたり住み
 鯨カツは昭和の匂ひ麻暖簾
 夏柳蘇州夜曲に酔ふ夕べ
 古書院の格子欄間や風薫り
 不動尊万緑を背に仁王立
 声低し逢魔が時の青葉木菟
 湖よりの風に煽られ筑摩祭
 梅檀の花の大木湖の風
 青大将悠然として追ひ出され

松岡 和子
 中井 弘一
 中本 吉信
 西田 史郎
 増田 一代
 伊東 和子
 伊藤 和子
 大島 菜美
 小澤 菜美
 笠井 清佑
 坂根 宏子
 阪本 哲弘
 佐用 圭子
 塩路 五郎
 田中 浅子
 辻 香秀
 黒住 康晴
 国包 澄子
 中川 澄子
 谷口 俊郎

夕風に火影ゆれつつ薪能
 老鶯の高音澄みしが銜せる
 短夜や産着縫ふ手の留まらず
 何ものも触れるべからず蟻の道
 リアカ―で紫陽花販ぐ園芸部
 諍ひはまづここまでよ苺つぶす
 勅使門の阿吽の仁王夏蛙
 梅雨入りの龍神の淵渦を巻く
 リラの香や行くも戻るも同じ道
 木香薔薇若きふたゆめ訪ふ門に
 宇治の里市民参加の茶摘かな
 豪商の一念の庭松の芯
 住職の静かな語り山法師
 植糸終ふる田や一斉の夏蛙
 咲き満ちて雅の池の花菖蒲
 東北へ下る「やまびこ」緑さす
 蠅を追ふ痛み忘るる程の朝
 すめるぎを目前にして汗忘れ
 緑蔭や比叡借景の円通寺
 石仏を探す林道みどり濃き

高谷 栄一
 稲田 和子
 常田 希望
 常田 創
 和田 郁子
 粟倉 昌子
 川崎 利子
 西郷 慶子
 杉本 綾
 中井登喜子
 難波 篤直
 西垣 順子
 西村 敏子
 能勢 栄子
 秦 和子
 藤本 秀機
 福本すみ子
 平井 紀夫
 松田 洋子
 三川美代子

せせらぎの音遠近に谷若葉
 白雲に峨々たる峯や梅雨晴間
 万緑の中やトロッコ列車行く
 通り雨馬上毅然と賀茂祭
 藤椅子に子規漫録とホトトギス
 水紋を残して去りぬ夏燕
 「夕顔之墳」ある町家風薫る
 街中の植田に白き雲とビル
 豪華なる川床に木陰のランチかな
 その声に怯えし記憶牛蛙
 代替はりすすむ母郷や古茶新茶
 湯上りや肌ざはり佳き藍浴衣
 風光る海へ歓声観覧車
 翡翠の瞬時の技や魚捉ふ
 夫の好む飛魚焼きて磯の味
 夏草に園児の列の見え隠れ
 若鮎の天麩羅づくしほろ苦き
 身の丈の茶壺ポストや緑さし
 摘みたてのサラダ菜夕餉彩りて
 麦秋や太鼓連打の鬼まつり

森田 利和
 山崎 真義
 山田 愛子
 横田 矩子
 渡部 法子
 吉田 宏之
 飯田美千子
 伊藤 憲子
 伊庭 玲子
 大松 一枝
 落合 晃
 小林 久子
 桂 敦子
 笹井 康夫
 佐々木 和子
 杉田 福
 鷺見たえ子
 辻 知代子
 土井久美子
 十時 和子

琥珀集

インドネシアへの旅 伊藤 純子

灼くる地や祈りの膝を深く折り
沐浴のをんなに泉滾々と

夏草に置く田の神の供物かな

恋ひ来たるバリの棚田の青田風

バリ島の子らは裸足や泉の辺

樹下涼し客待つ輓馬水を呑む

更紗干せる工房の土間風涼し

知覧 坂上 香菜

牡丹鱧 北尾 章郎

南風吹く遺書に覚悟の「沈」の文字

あざやかな特攻花や基地の跡（知覧では錦鶏菊を特攻花という）

ぼろぼろの零戦に触れ青葉冷

特攻隊の三角兵舎青葉闇

「ホタル」とのみ刻む碑走り梅雨

葉桜や特攻兵の征きし町

青海波のごとき茶畑知覧みち

研ぎ澄ます関の逸品牡丹鱧

踏まれてぞ今日のありけり麦の秋

若返りしと思ふ自信の更衣

ほうたるや闇に逢瀬の若者ら

明星へ弓張る月の涼しかり

遊園地の児ら満足気夕薄暑

割り当ては一つ限りや筍掘る

湖 東

夏燕湖東の寺へ風を切り
 麦秋の湖東秘仏の力得て
 菩提樹の千年に侍る青き苔
 国分寺跡の尺蠖木を登る
 五月忌さつきいみ薬師の掌よりえにし綱
 参道の千体地藏胡瓜草
 矢車草単線列車の起こす風

宮 田 香

鍋 祭

狩衣の童女上目に鍋祭
 蹴り上ぐる奴の足や青嵐
 腹藏なき埴輪を抜くる青葉風
 夏鴨や婦随の水輪重なりぬ
 格別のことなきひと日豌豆むく
 風遊ぶ茅花の穂波むずかゆし
 老鶯の声繋ぎあふ谷わたり

中村ふく子

冷酒の香

懐かしや造り酒屋に冷酒の香（恵那市岩村）
 せせらぎをBGMに夜涼窓
 近江路のメタセコイヤや夕涼み
 薫風や肚はらに当地の五平餅（茶白山）
 天空のリフトで巡る新樹光
 「生き延びよ」軍師官兵衛藤の冷
 紫陽花を供へ華やぐご仏前

首夏の海

ガーデンアーチ潜るモネ絵の日傘かな
 首夏の海眩し空海修行窟
 潮寂びを極むる寺や花海桐
 ヤッホーの声を攫ひぬ南風
 芍薬の蕾重しや水替ふる
 田植機の出を待つ水田夕映ゆる
 サッカーボール追へど奪はず夕焼の子

鈴木 照子

松田 和子

郁子の花

山口キミコ

青あらし

山本孝夫

郁子の花咲ける古民家レストラン

乱れ落つる実梅参道天龍寺

保津峡のトロッコ列車若葉風

保津川を下る客船青嵐

近江路の快水浴場夏案内

湖岸いま白砂波音松の芯

所狭しと伸びるがままよ今年竹

友引

宮崎左智子

早苗田

石川かおり

つつじ燃え嘘もまことも包みけり

明易し夫は枕を残すのみ

友引ゆいんの死出の山越えほととぎす

パナマ帽似合っていたね雲の峰

鼻唄も音痴の亡夫風薫り

初咲きの山の紫陽花ふた七日

夫の衣に切符一枚螢の夜

石垣に新たな青菜百濟寺（百濟寺三句）

縁紐にみ手の温もり青あらし

秘佛見て下闇下る足軽き

劣れども有りて嬉しや淡竹の子

麦秋や竹刀打ち合ふ体育館

新じゃがや地にへばりつく老夫婦

孫想ひ早手回しの小梅漬け

実桜を踏む石段の濡れてをり

願掛けの大草鞋かな緑さし

早苗田に映る連山風微か

山寺へ続く石段著莪の花

荒彫の秘仏微笑む麦の秋

先輩と呼ばれたる日々柿の花

またひとつ老舗閉づるや梅雨深き（駿河屋倒産）

麻のれん

井口 淳子

水木の花

森下 康子

くぐり抜くる古き商家の麻のれん（近江八幡五句）

花菖蒲活けて老舗の蔵座敷

竹琴の音色床しや四葩膳

夏燕黒漆喰の軒先に

堀巡り歴史に浸る遊び舟

赤帽のマーチングバンド新樹光（加賀百万石祭二句）

樟若葉百万石の武者の練り

インパルスの機雲を確と夏の空

梅雨兆すブルスケッタを丸齧り

川縁りを飾る水木の花いとし

合歓の花刻とどめたき午後居間

蚩狩の闇懐かしや亡父を恋ひ

残せるは夕餉の皿のパセリのみ

緑濃き森羅万象母太る

青葉の頃

木戸 宏子

子午線

橋本 靖子

緑さす生身観音鑿の跡

初夏や十二神将干支を頭に

新緑に肌まで染まり陶の里

百片の更紗を繋ぎ夏衣

夏兆す風吹き抜くる寺のカフェ

小ぶりなる如来の膝へ五月の陽

鬼瓦面三つあり風青く

装いの仕上げはミツコ街は初夏

追従がわざとらしくて黒日傘

南風涼し子午線を守る街を行く

鮮魚店の並ぶ魚棚蛸が這ふ

小判草風にカサコソ内緒ごと

焼き討に猶も菩提樹咲く寺院（百濟寺二句）

今に残る穴太積なり木下闇

瑠璃集

皐月

谷口 俊郎

旧友の名の浮かび来ずビール注ぐ（同期会）
「生きてたら」と弱音吐き合ひビール呑む
賑はへる日曜菜園草むしり
どの畑も太りに太る莢豌豆
青大将悠然として追ひ出され

筑摩祭

国包 澄子

湖よりの風に煽られ筑摩祭
紅つけて歩みゆるやか鍋乙女
新入りも古参も和み目高鉢
灯明に浮かぶ神将堂涼し
み仏と縁の綱や新樹光

連獅子

高谷 栄一

咲き誇る薔薇は真紅のバグマン
夕風に火影ゆれつつ薪能
夏の夜を舞へる連獅子笛高く
漆黒の人影よぎる螢の夜
羽衣の帯なびくかに螢の火

渦の道

中川すみ子

京の街を見渡す寺院風涼し（北白川二句）
詩仙堂の庭の静寂や滝の音
鳳凰の翼眩しや夏空に
梅檀の花の大木湖の風
瀬戸内の五月の海や渦の道

茄子の花

稲田 和子

争ひの後に残れる蜥蜴の尾
根もとには蕈整然と夏野菜
云ひ伝へ込めたる言葉茄子の花
惣菜をひき立ててゐる豆ご飯
老鶯の高音澄みしが欲せる

八月号月評

塩路 隆子

特攻隊の三角兵舎青葉蘭

坂上 香葉

第二次世界大戦の末期、特別攻撃隊元基地であった知覧には、今も隊員の出発の前夜まで使っていたベッドや、固い粗末な枕を置いた三角兵舎がある。樹木に覆われた三角兵舎は「青葉蘭」そのもので、日本の暗黒時代を象徴している所。心に響く作品である。

灼くる地や祈りの膝を深く折り

伊藤 純子

ジャワ島の東に隣接するバリ島へ旅をされた時の作品である。意匠を凝らした古典舞踊や更紗など、関連句にうまく詠み込まれている。インドネシア共和国の中でヒンズー教を信仰する唯一の島で信仰は篤い。「灼くる地」「膝深く折り」などの措辞がその深さを思わせる。良い作品である。

研ぎ澄ます関の逸品牡丹鱧

北尾 章郎

長良川沿いにある関市は、鎌倉時代より関鍛冶の名は高く、いまでも刃物や剃刀の生産地で名高い。古くから使い慣れた砥石で研ぎ澄ました包丁でもって骨切りを

し、湯引きした鱧が、まるで牡丹の花のように見え、牡丹鱧と名付けられたが、梅味でいたたく涼味万点の鱧と関の包丁の取り合わせのうまさ、さすがの作品である。

国分寺跡の尺蠖木を登る

宮田 香

国文寺跡の広い敷地から、一匹の尺蠖虫に焦点を絞って入った技法は、流石若手リーダーとしての手腕を発揮した作品である。他にも「五月忌」などで作られた句もあり挑戦の態度は追隨を許さない。今後平生使われていない季語を取り入れた場合、その作品の季語が不消化に終わっていないかなど推敲を重ね、発表するのも勉強の一つである。次の挑戦を楽しみにしている。

狩衣の童女上目に鍋祭

中村ふく子

湖よりの風に煽られ筑摩祭

国包 澄子

先月号にも筑摩祭の句を拝見して鍋釜祭の奇祭を知った。米原市筑摩神社で（五月三日）行われる祭礼で、狩衣を着た童が鍋・釜を被って練るお祭りである。馴れぬ釜を被った童女が「上目遣い」に歩く姿、またたまたまその日は琵琶湖の風に煽られて童女たちが戸惑いながら歩く姿など想像出来て楽しい。他に鍋乙女。鍋被り、筑摩鍋・鍋乙女・鍋被りなどの季語があり、楽しさが広がる。

（以下略）